

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：32639

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730437

研究課題名(和文)大都市商業地域の更新・変容過程における若年自営業者層に関する社会学的研究

研究課題名(英文)The Regeneration of Manufacturing in Postindustrial Inner City: A Case Study of "Mono-Machi" in Taito, Tokyo

研究代表者

下村 恭広(Shimomura, Yasuhiro)

玉川大学・リベラルアーツ学部・准教授

研究者番号：00350372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東京都台東区南部「徒蔵」(御徒町-蔵前間)において2000年代後半から顕著となった、ファッション雑貨工業(ハンドバッグ、鞆、靴、革小物類、ジュエリー、アクセサリ等)における若年起業家の創業過程を対象とした。隅田川流域に集積するファッション雑貨工業では事業所数の減少が続いているにもかかわらず、この地域では従来とは異なる業態の事業所(クリエイターと呼ばれることもある)の開業が進んでいる。本研究ではこれについて、2004年に開設された創業支援施設の卒業企業が、既存の社会的分業構造の中で新たな取引関係を作っていった過程として分析した。

研究成果の概要(英文)：This programme seeks to clarify the restructuring process of Tokyo's inner city through the case study of "Mono-Machi" movement: the community development through manufacturing rejuvenation and place branding lead by the local manufacturers in Taito, Tokyo. This programme analyses that movement as a socio-spatial transformation of post-industrial urban economy.

研究分野：社会学

キーワード：都市 製造業 新規開業 産業地域社会 東京

1. 研究開始当初の背景

都市社会学では都市の社会構造と空間構造との関係に特別な関心を払い、その変化を理解するためのモデルを提起してきた。そこで論点のひとつとなるのが、どのような産業の動向を中心に据えてその空間編成を把握するのかということである。このモデルのひとつとして、創造都市論を位置づけたい。創造都市は、大企業中心の大量生産に代わって、零細企業のネットワークによるクラフト型生産が主軸となった都市のモデルである [佐々木,2012:44]。そこで言及されるクラフト型生産は、かつての生産システムへの回帰というより、新しい技術やアートを組み込んだ再構築であり、産業と文化との融合(文化的生産)が先端的な経済発展の鍵とみなされる。しかし、この学説を都市の社会-空間構造モデルとするには、文化と産業とが結びつく「創造の場」についての再検討が必要である。「創造の場」はそこで経済的・文化的価値を創出できるような、芸術、企業、市民が出会う場であり、信頼関係を基礎にした社会的ネットワークの結び目とされる [佐々木,2014: 231-239]。そうした場合は、どのような空間編成に基づいて成り立つのだろうか。また、日本の大都市圏の社会-空間構造は、都市自営業を含む零細規模事業所の厚い集積が見られ、それらが比較的近年まで存続してきた点に特徴がある。このような既存製造業集積の「創造の場」への発展が可能となるには、いかなる条件が必要だろうか。

2. 研究の目的

前項をふまえ本研究は、製造業における文化的生産の進展と、それが従来とは質的に異なる空間編成を伴う過程を、東京の製造業集積地域において示すことを目的とする。大都市製造業集積地における自治体産業政策では、生産拠点の海外移転が進む中で、既存の産業集積を単に消えゆく存在として見るのではなく、縮小しつつもそこに新たな機能が

形成される契機を見いだそうとしてきた。その中でもここでは、製造業を観光資源と結びつける試みに注目する。ファッション雑貨工業の集積地である墨田区は、1980年代から「工房文化の都市」を目指し、小さな博物館、すみだマイスター、工房ショップから成る3M運動を展開し、この分野における先駆的事例とされている。近年では新たな形態での工場見学のイベント(オープンファクトリー)を実施して製造業事業者と消費者との接点を広げようとしている。同様の動きは、機械金属工業の集積地である大田区で展開されている「大田クリエイティブタウン構想」にも見られる [岡村・他,2014]。これらはいずれも、地域のオーセンティシティを確立することによる、製造業における文化的価値の産出の試みにほかならない。それらは関与主体にとっていかなる必然性をもって展開しているのだろうか。

これについて本研究では、台東区南部の「徒蔵(かちくら) 御徒町-蔵前間」の事例に基づき明らかにする。台東区も墨田区や大田区と同様の動きが、民間事業者の主導により進んでいる。複数の製造業事業所が連携して進めている「モノづくりのマチづくり」である。その取り組みは、台東区のインキュベータ(創業支援施設)である台東デザイナーズビレッジが開設されて以来、そこを卒業した企業の地域定着を契機として始まった。この事例の特徴は、製造業事業所が「徒蔵」と呼ばれる新しい空間を生み出そうとしている点である。この空間はどのようなもので、その出現は何を意味するのか。本研究ではこれを隅田川流域のファッション雑貨工業集積の空間編成に起きている変容として捉え、その意味を理解できる最も顕著な局面として、事業者が従来の生産システムからの脱却を強いられるなか、既存の社会的分業構造とは異なる取引関係を作り出そうとする試みに焦点を当てる。

3. 研究の方法

モノマチ、台東デザイナーズビレッジ、対象地域、ハンドバッグ製造業を中心とするファッション雑貨工業に関する文献資料や官庁統計を収集し、また当該地域のイベント（第4回モノマチ、第2回A-round）へボランティアスタッフとして参加、その準備過程における観察とインフォーマルな聞き取りを行った。そのうえでモノマチに関与している人々について、地域産業の社会的分業構造において占める位置に注意しながら対象を選び、聞き取り調査を実施した。問屋2名、メーカー4名、加工業者2名、新規開業者5名、台東区役所産業観光振興課、台東デザイナーズビレッジ インキュベーションマネージャー 鈴木淳氏から協力を得られた。調査で得られた知見については、第2回A-roundにあわせて調査実習報告会を開催し、調査協力者への意見を仰いだ。

4. 研究成果

（1）ファッション雑貨工業の社会的分業構造とその空間編成に生じている変容

東京の隅田川流域はファッション雑貨工業（ハンドバッグ、鞆、靴、革小物類、ジュエリー、アクセサリー等の製造業）の集積地であり、問屋を中心にメーカーと加工業者が工程を分業して営まれる生産活動が展開されてきた。この集積は日本橋横山町と浅草橋を要に、問屋の多い地域、メーカーの地域、加工業者の地域というように、北東に開かれた扇状に三層に分化している。徒蔵地域はこの要に近い地帯にあたる。

1980年代前半までに形成されたこの空間的編成は、90年代以降は量的に縮小している。例えばハンドバッグは、市場が高価格帯と低価格帯へ分極化し、それぞれへの輸入品が増大している。この地域では中間価格帯を中心に百貨店で販売される製品が手がけられて

きたが、近年は百貨店の売上減少と、海外ブランドの国内でのライセンス生産の打ち切りが続いている。これにより産地と百貨店および海外ブランドとをつないできた問屋が地域から離れ、近隣諸国の工場との取引に軸足を移すことになり、その結果メーカーと加工業者は独自商品の生産と販売が求められるようになってきている。とはいえ従来は問屋が中心に商品企画とデザインを行ってきたため、メーカーや加工業者が単独で付加価値の高い商品を製造することは難しい。

（2）文化的生産の空間編成

こうした状況を打開するためになされている様々な取り組みは、製造業集積地における文化的生産の確立について示唆的である。ここでは地域のブランド化と、その域内事業所間での新しい関係構築の二点に絞って述べておく。

地域のブランド化

メーカーや加工業者が付加価値の高い独自商品を製造するにあたっては、自力でのブランド構築が必要となるが、これを企業単体で行うだけでなく、地域全体のブランド化によって進めることが模索されている。これまで徒蔵は、有名ブランドのライセンス生産を行ってきたが、そのブランドを前面に立てるために、実際に製造がなされるこの地域についての情報を発信することはなかった。これに対して2011年より、徒蔵にある様々な業種の100社以上の事業所が、「モノマチ」（モノづくりのマチづくり）と呼ばれる地域イベントを合同で実施し、情報発信を試みるようになった。モノマチの最大の特徴は、工場などの製造現場を一般に公開し、また期間限定の小売も行い、来場者がそれらを見ながら域内を回遊する点にある。例えば革製の名刺入れを、来場者がある場所で材料を購入し、そのあと裁断、皮漉き、箔押、縫製についてそ

それぞれの工場を歩いて回りながらひとつの商品を仕上げるといように、体験型の企画が実施されている。

新しい社会的分業の模索

モノマチは、こうした消費者やバイヤー向けの情報発信にとどまらず、このイベントを通じた域内事業所の関係構築にもつながっている。徒蔵では、同業者以外での取引関係は希薄であったが、イベントの企画を練り、運営していく過程を通じて、参加している各社が互いの事業内容について知ることができ、それによってこれまではなかった取引関係が生まれている。

また、この新たな関係構築に、この地域での新規開業者が数多く加わっていることが重要である。徒蔵では近年若いクリエイターの新規開業が顕著で、老朽化した建物が彼らのアトリエショップに改装されている事例が増えている。これは台東区が2004年に設立した台東デザイナーズビレッジと呼ばれるファッション雑貨工業の創業支援施設の影響が大きい。設立から10年間に56の企業が卒業し、うち24社が区内に事業所を開設している。こうした新規開業者にとっての創業過程は、一方で展示会に出展を続けて小売店のバイヤーから注文を取りつつ、近隣地域の加工業者に生産を発注し量産体制を整えることである(鈴木 2011)。つまり企業としての自立は、地域での社会的分業の中に入り込むことを意味している。これは既存の加工業者から見ると、慣れ親しんできた取引先とは異なる取引関係を作っていくことでもある。そのため、製品の仕上がりイメージの共有が難しく、加工技術の評価基準についても齟齬が生じやすい。こうしたコミュニケーションの難しさに、むしろ創造的な体験を見いだすことができるかどうか、この地域における製造業の存続にとって重要な分岐点のひとつとなっている。

引用文献

岡村祐・野原卓・川原晋・大田クリエイティブタウン研究会 2014「大田クリエイティブタウン構想と実践」『季刊まちづくり』42: 104-115.

佐々木雅幸 2012『創造都市への挑戦 産業と文化の息づく街へ』(岩波現代文庫) 岩波書店

鈴木淳 2011『「好き」を仕事にする自分ブランドのつくりかた』アスペクト

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

下村恭広、「都心製造業集積地域の文化的生産：東京都台東区における『モノづくりのマチづくり』」、『日本都市社会学会年報』、査読有、33巻、2015年、ページ未定

〔学会発表〕(計3件)

下村恭広、「大都市製造業集積地域における文化的生産：東京都台東区における『モノづくりのマチづくり』を事例として」、日本都市学会第61回大会、2014年10月26日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

下村恭広、「『クリエイター』の地域定着過程と都市空間再編：台東デザイナーズビレッジの創業支援事業を事例として」、日本都市社会学会第32回大会、2014年9月11日、専修大学生田キャンパス(神奈川県川崎市)

下村恭広、「大都市零細工業の変容と都市空間：東京都台東区のファッション雑貨工業を事例として」、地域社会学会第39回大会、2014年5月10日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)

6. 研究組織

研究代表者

下村 恭広 (SHIMOMURA, Yasuhiro)
玉川大学・リベラルアーツ学部・准教授
研究者番号：00350372